

二人町奴

国枝史郎

青空文庫

1

「それ喧嘩だ」

「浪人組同志だ」

「あぶないあぶない、逃げろ逃げろ」

ワーツと群衆なだれを打ち、一時に左右へ開いたが、遠巻きにして眺めている。

浪人組の頭深見十左衛門、その子息の十三郎、これが一方の喧嘩頭、従うもの二三十人、いずれも武道鍛練の、度胸の据わった連中である。

その相手は土岐とぎ与左衛門と、その一味の浪人組、その数およそ三四十人。

おりから春、桜花の盛り、所は浅草観世音境内、その頃にあつても江戸一の盛り場、しかも真昼で人出多く、賑わいを極めていた時であった。

「あいや土岐氏」と十三郎、ヌツとばかりに進み出た。

年この時二十八歳、色白く美男である。その剣道は一刀流、免許の腕を備えている。

「過日我らが組下の一人、諸戸もろと新吾と申す者、貴殿の部下たる矢部藤十殿に、鞆当てのこ
とより意趣となり、双方果し合い致したるところ、卑怯にも矢部殿には数人を語らい、諸

戸新吾を打ち挫き、恥辱を、与えなされたため、諸戸は無念を書き残し、数日前に腹切つてござる。以来我ら貴殿に対し、矢部殿お引き渡し下さるよう、再三使いをもって申し入れましたが、今になんのご返事もない。組下の恥辱は頭の恥辱、今日ここで偶然お目にかかった以上、貴殿を相手にこの十三郎単身お掛け合い致しとうござる。土岐氏、即座にお答え下され。さあ矢部殿を渡されるか？ それともビツシリお断わりなさるか？ 渡されるとあればそれでよい。当方にて十分成敗致す、渡されぬとあつては止むを得ぬ。貴殿と拙者この場において、尋常の勝負、抜き合わせましょう！ いかがでござるな、さあ、ご返答！」

凜とばかりに云い入れた。

「お気の毒ながらお断わりじや」

こう云つたのは与左衛門。年の頃は四十五六、頬髯の濃い赤ら顔、上背があつて立派である。

「いかにも我等組下の者矢部藤十儀、貴殿の組下、諸戸殿と果し合は致しましたが、卑怯の振舞いは決して致さぬ。傍らに引き添った同僚が、仲間の誼み自分勝手に、助太刀の刀を揮つた迄、これとて考えれば当然のこと、志合つて組をつくり、一緒の行動とる以上、

助け助けられるに不思議はござらぬ、矢部を渡さば成敗する。かよう云われる貴殿の言葉を、承知致したその上で、矢部を貴殿に渡したが最後、拙者の面目丸潰れじや。お断わりお断わり、決して渡さぬ！」

これも立派に云い切った。

「なるほど」と云ったは十三郎、

「お言葉を聞けばごもつとも、よもやムザムザ矢部殿を、我々の手へはお渡しあるまい。止むを得ぬ儀、貴殿と拙者、ここで果し合い致しましょう」

「左様さ」と云ったが土岐与左衛門、承知するより仕方なかつた。

「よろしゅうござる、お相手致そう」

それから部下をジロリと見たが、

「これ貴殿方、助太刀無用、我ら二人だけで立ち会い致す。よろしいかな、お心得なされ」
こうは云ったが眼使いは、その反対を示していた。一同刀を抜き連らね、一斉に引っ包んで打って取れ。よいかよいかと云っているのである。

「いぎ」と云うと土岐与左衛門、大刀サツと鞘ばしらせた。

グーツと付けたは大上段、相手を呑んだ構えである。

「いぎ」と同時に十三郎、鞘ばしらせたが中段に付けた。

シ——ンと二人とも動かない。

春陽を受けて二本の太刀、キラキラキラキラと反射する。

それへ舞いかかるは落英である。

ワ——ツと群集は鬨を上げた。だが直ぐに息を呑んだ。と、にわかには反動的に、浅草の境内ひっそりとなり、昔ながらに居る鳩の啼声ばかりが際立って聞こえる。

土岐与左衛門これも免許、その流儀は無念流しかも年功場数を踏み、心も老獪を極めて
いる。

相手の構えを睨んだが、

「油断はならぬ。立派な腕だ。しかし若輩、誘つてやろう」

ユラリと一歩後へ引いた。

果して付け込んだ深見十三郎、

「むっ」と喉こうおん音潜めた気合。掛けると同時に一躍した。ピカリ剣光、狙いは胸、身を平ひらめかして片手突き！

だが鏘然と音がした。

すなわち与左衛門太刀を下ろし、巻き落とすイキで三寸の辺り、瞬間に払ったのである。
十三郎、刀を落としたか？

落とさばそこへ付け込んで、無念流での岩石落とし、肩をはねよう一刀にカツ！ と与左衛門は見張ったが、期待外れて十三郎、飛び退って依然同じ構え、中段に付けて揺がない。

と、思ったも一刹那、年若だけに精悍の氣象、十三郎スルスルと進み出た。

2

据わった腰、見詰めた眼、溢れようとする満腹の覇氣スルスルと進み出た十三郎に押し、土岐与左衛門圧迫を感じ、タツタツと三足ほど退いたが、やや嘔かれごえ声で、

「さあ方々！」

声に応じて三四十人、与左衛門の部下一斉に、刀を抜いたがグルグルグル、深見十三郎を引つ包んだ。

「卑怯！」と叫んだは十三郎の部下、これも一斉にすっぱ抜くと、与左衛門の部下を押しへだて、ジ——ツと、一列に構え込んだ。

まさに太刀数六七十本向かい合わせてぴたりと据わり、真劍の勝負、無駄声もかけずただ、位取った刀身が、春陽をはねて白々と光り、殺氣漂うばかりである。

はたもとやっこ
旗本奴と町奴、

まちやっこ

それと並び称された浪人組、衣裳も美々しく派手を極め、骨柄

いずれも立派である。その数合わして六七十人、真昼間の春の盛り場で、華やかに切り合おうというのである。

凄くもあれば美しくもある。

遠巻きにした群集達。一時に鬨作つて逃げ出したが、さらに一層遠くへ離れ、勝敗はどうかと眺めている。

氣の毒なのは店屋である。バタバタと雨戸を引いてしまった。側杖を恐れたからである。役人も幾人かいたけれど、うかと手を出したら怪我しよう！ で茫然と見守っている。

仲裁する者はないのだろうか？ なければ血の雨が降るだろう、死人も怪我人も出るだろう。

群集のどよめき治まると、深刻な静寂が寺域を領し、その中に立っている観音堂、宏大な図体を頑張らせてはいるが、恐怖に顫えているようにも見える。

と、この時仁王門の方から、修羅場にも似合わぬ陽気な掛け声が、歌念仏の声をまじえ、

ここの場所まで聞こえてきた。

次第々に近寄つて来る。

見れば飾り立てただしであった。巨大な釣鐘が乗っている。

吉原十二街から寄進をした。釣鐘を運んで来たのである。

にわかになしがつまってしまう。浪人組が構え込んでいる。白刃がタラタラと並んでいる。そこを押し通つて行くことは出来ない。

賑やかな囃も急に止み、それを見物の人々も息を呑んだ。

この間も二手の浪人組、太刀を構えてせり詰めて行く、やがて白刃が合わされるだろう、境内は血潮で染められるだろう、負けた方は逃げるに相違ない。勝つた方はきつと追つかけるだろう。乱闘となつたら見物にも、善男善女にも怪我人が出来よう。奉納の釣鐘にも穢れがつき、大勢の寄進者も、傷付くかもしれない。

「逃げる逃げろ」と云う者もある。

「一まずだしを引つ返せ」と喚き立てる者もある。

あぶないあぶない折柄であった。

「どいた、どいた、ご免下せえ」

ドスの利く声を掛けながら、群集を左右に掻き分け、だしに近寄った人物がある。

三十がらみで撥^{ばちびん}髪頭、桜花を散らせた寛^{かんかつ}活衣裳、鮫^{さめざや}鞆の一腰落し差し、一つ印籠、駒下駄穿き、眉迫つて鼻高く、デップリと肥えた人物である。

丁寧ではあるが隙のない態度、ジロリと一同を見廻したが、

「大変な騒動になりましたな。さぞ皆様もお困りでしょう、ケチな野郎ではございませんが、私^{わっち}がちよつと仲裁役、一肌脱ぐことに致しましょう、と云いたいんだがどう致しまして、すつぱだかになつて踊つてみせます。ついでには釣鐘を借りますよ。傷は付くかもしれませんが、まずまず血では穢されますまい。まっぴらご免」と云つたかと思うと、白の博多の帯をとき、クルクルと衣裳を脱ぎ捨てたが下帯一つの全裸体、何と堂々たる体格だ、腕には隆々たる力瘤、胴締まつて腰ガツシリ、黒々と胸毛が生えている。そのくせ肌色皓々と白い。

腕をのぼすと釣鐘の龍頭、グツと搦んで引き下ろした。見る間に双手を鐘の縁、そいつへ掛けると大力無双、頭上へ差し上げたものである。

と、投げ込んだは浪人組の中、地響と共にゴ——ンと鳴り、音が容易に消えて行かない。仰天した二派の浪人組、サ——ツと左右へ引いたが付け目、ヒラリと飛び込んだ裸体の

男、鐘を引き起こすとカツパと伏した。龍頭を踏まえて突つ立ったが、左右を見比べると両手を拡げ、さてそれから云いだした。

「お見受けすれば浪人組、今世上に名も高い、土岐与左衛門様に深見様、どんな意趣かは存じませぬが、賑わう浅草の境内で時は桜の真つ盛り、喧嘩沙汰とは気の知れぬ話、其角宗匠が生きていたら、花見る人の長刀、何事だろうと申しましよう。喧嘩貰つた、お預け下せえ。そういう私は人入れ家業、芝浜松町に住居する富田家清六の意気地のない養子、弥左衛門といつてほんの三下だが、親分は藩隨院長兵衛兄弟分には唐とうげん犬権兵衛、放駒四郎兵衛、夢の市郎兵衛、そんな手合もございます。お預け下せえお預け下せえ。それともと云うと腕を組んだ。

「仲裁役には貫禄が不足、預けられぬと仰おつしや言るなら、裸体はだかで飛び込んだが何より証拠、とうに体は張つて居りやす。切り刻んで膾なますとし、血祭りの儀に上げてから、喧嘩勝手におやり下せえ。息ある限りは一步ものかねえ、そこは男だ、一步ものかねえ。さあさあ預けて下さるか、それとも、膾なますに切り刻むか、ご返事ご返事、聞かせて下せえ！」

男を磨く町奴。ドギつく白刃の数十本の中で、小気味よく大音を響かせた。

ワ——ツと群集のどよめいたのは、その颯爽たる男振りに、思わず溜飲を下げたのであ

ろう。

3

気を奪われた浪人組、互いに顔を見合わせたが、そこは老功の与左衛門である。けつく幸いと考えた。

「こいつはいつそ任せてしまえ」

そこで拔身をダラリと下げ、ツト進み出ると、云ったものである。

「これはこれは弥左衛門殿か、お名前はとうから存じて居ります。争いの仲裁まずお礼、いや何原因も知れたことで、折れ合おうとすれば折り合います。またお顔を立てようとなら、無理にも折り合わなければなりません。それにしても実に大力無双、殊には裸体で突つ立たれたご様子、洵まことに洵まことに立派なもので、そういうお方にお任せし、事を穩便に治めるは、我々にとつても光榮というもの、但し果して深見氏の方で」

すると十三郎もズツト出た。

「いや拙者として同じでござる。弥左衛門殿のお扱いなら、なんの不足がございましょう。白柄組とか吉弥組とか、旗本奴の扱いなら、とかく何かと言つても見たいが、長兵衛殿の

お身内なら、我々にとつてはむしろ味方、弥左衛門殿のご高名も、かねがね承知致して居ります。土岐氏においてそのおつもりなら、スツパリ何事もあなた任せ！」

「ま、任せて下さるか……」

弥左衛門喜んで辞儀をした。

「それでは何より真つ先に、抜いた白刃を元の鞘へ」

「よろしゅうござる」と土岐与左衛門、部下の一同を見廻したが、

「な、方々聞かれるような次第、さあさあ刀をお納め下され」と自身パツチリ鞘に納める。

「貴殿方にも」と十三郎「刀をお納めなさるがよろしい」——で、パツチリと鞘に納める。

血の雨の降るべき大修羅場は、こうして平和に治まったのである。

「こうなったのもこの釣鐘が私に役立たせてくれたからで、目出度い釣鐘、有難い釣鐘、

さあさあそれでは元の座へ」

龍頭を掴むとグ——ツと引き上げ、肩へ担ぐと弥左衛門、だしの上へそつと置いた。

「さあさあ皆さん景気よく、奉納寄進しておくんなせえ」

声を掛けると美しい女や男達、ドツと喜びの声を上げ、すぐに続けて賑やかな囃、それからだしを引き出した。無事に寄進が出来たのである。

見ていた群集も賞讃し、

「釣鐘様！ 弥左衛門様！」

「釣鐘の親分！ 釣鐘弥左衛門！」

——爾来人々弥左衛門を、釣鐘弥左衛門と称したが、それ程の釣鐘弥左衛門も、兄分と立てなければならなかったのは、緋鯉ひこいの藤兵衛という町奴であった。

4

ある日と云つてもずっと後だ——寛文年間のことである。

「兄貴おいでか」と云いながら、訪ねて来たのは釣鐘弥左衛門。

「これは釣鐘、珍らしいの」

こう言つたのは緋鯉の藤兵衛、長火鉢の前に坐っている。

向かいあつて坐つた釣鐘弥左衛門、今日は一向元気がない。

そういうえば緋鯉の藤兵衛にも、さっぱり元気がないのである。二人、しばらく物も云わない。

「近頃浮世が面白くないよ」

やがて云つたのは弥左衛門である。

「うん、そうだろうな俺もそうだ」

緋鯉の藤兵衛もものうそうである。

「長兵衛親分がああなつて以来、俺ア眼の前が真つ暗になつた」

「相手の水野一統は、ピンシャンあの通り生きていて、なんのお咎めもないんだからなあ」

これが弥左衛門には心外らしい。

「それにさ唐とうけん犬の兄貴達が、水野を討とうと切り込んで、手筈狂つて遣り損なつてから

は、いよいよお上の遣り口が、片手落偏へんぱ頗に見えてならねえ」

これにも弥左衛門は不平らしい。

「うん、そいつだよ、偏頗へんぱだなあ」

緋鯉の藤兵衛も不平らしく、

「爾来お上では俺達を、眼の敵にして抑えるんだからなあ」

「兄弟分の大半は、遠島の仕置にされてしまった」

「町奴の勢力も地に落ちたよ」

「そいつも水野をはじめとし白柄組の連中のお蔭だ」

「その連中がよ、どうかというに、近来益々のさばり居る」

「夜ふけて通るは何者ぞ、加賀爪かがづめ甲斐かひか泥棒か、さては坂部の三十か……江戸の人達は唄にまで作り、恐れおびえているのになあ」

「お上の片手落ちも甚しいものさ」

緋鯉の兄貴と、釣鐘弥左衛門、にわかに調子を強めたが、

「それにしても俺たちには不思議でならねえ、唐犬の兄貴一統が水野の屋敷へ切り込んだ時、俺らは旅へ出ていたから、加わることも出来なかつたが、兄貴はその時江戸にいたはずだ、それなのに一味に加わらずに、一人仲間から外れたのは、一体どういう訳だろうね？ 他ならぬ兄貴のことだから、卑怯の結果とは思われねえが、俺らには訳がわからねえ」

本心を聞きたいというようにグツと弥左衛門眼を据えた。

「うむ、それか」と云つたものの藤兵衛はしばらくは物を云わない。

「やり損なうに相違ないと、俺らハッキリ睨んだからさ」

それから少し間を置いたが、

「相手がああいう相手だけに、一度で片づくと思つては早すぎる。一番手が失敗した場合、二番手の備えをしておかないとの」

「なるほど」と釣鐘弥左衛門、こいつを聞くと頷いた。

「それじゃア兄貴は二番手をもつて任じ、長兵衛どんや唐犬の兄貴の、敵を討とうとするのだね？」

「とにかく憎いは旗本奴、わけても水野十郎左衛門、白柄組の一党だよ。この儘のさばらせちやア置かれねえ」

「ところで兄貴、その手段は？」

「ここにあるよ」と胸を打った。

「胸三寸、誰にも言わねえ」

「俺らにも明かせてくれねえのか」

気色ばむ弥左衛門を慰めるように、

「俺一人で出来る仕事なのさ、無駄なたくさん殺生は俺らにとっちゃア好ましくない。

だがな」と藤兵衛しんみりとなつた、「もしものが俺にあつたら、それ、お前とは縁の深い、あの浅草の鐘でもついて、回向というやつをやってくれ。そうしてなんだ俺が死んだら、いよいよ町奴は衰微するだろう、そこでお前だけは生きながらえて、町奴の意気をあげてくれ、こいつが何より肝心だ、それはそうと、しめっほくなつた。さあさあこれ

から一杯飲もう」

5

藤兵衛は谷中に住んでいた。そこで谷中の藤兵衛とも云う。彼は金魚組の頭領であつた。そこで緋鯉の藤兵衛とも云う。軀幹長大色白く、凜々たる雄風しかも美男、水色縮緬の緋鯉の刺繡ぬいとり、寛活伊達の衣裳を着、髪は撥ばちびん髪、金魚額、蟬鞆の長物落し差し洵まことに立派な風采であつた。

そうして彼は名門でもあつた。その実姉に至つては、春日局かすがのつぼねに引き立てられ、四代將軍綱吉の乳母めのと、それになつた矢島局であり、そういう縁故があるとところから、町奉行以下の役人達も二目も三目も置いていた。但しそのためにそれを利用し、藤兵衛決して威張りはしない。覇気の中にも謙遜を保ち、大胆の中にも細心であつた。

だが親分藩隨院長兵衛、水野十郎左衛門のために騙り討たれた。そればかりか唐犬権兵衛、夢の市郎兵衛、出尻清兵衛でっしり、小仏小兵衛、長兵衛部下の錚々たる子分が、復讐の一念懲りかたまり、水野屋敷へ切り込んだが、不幸にも失敗をした揚句、一同遠島に処せられても、徳川直参という所から、水野一派にはお咎めもなく、依然暴威を揮っているのが、

勘にさわつてならなかつた。

「どうともして、水野に腹切らせ、白柄組を瓦解させ、一つには親分の恨みを晴らし、二つには兄弟分の怒りを宥め、三つには市民の不安を除き、旗本奴と町奴との長い争いを止めたいものだ」

これは日頃の念願であつた。

ところがとうとうその念願が遂げられる機会がやつて来た。

「旗本に楯つく町奴というもの、是非とも一度見たいものだ」

將軍綱吉が云い出したのである。

「それでは」と云つたのは松平伊豆守、かの有名な智慧伊豆であつた。

「矢島局様実弟にあたる、谷中住居の藤兵衛という者、今江戸一の町奴とのこと。大奥に召すことに致しましょう」

「おおそうか、それはよかろう」

そこで藤兵衛召されることになつた。

雀こおどり躍したのは藤兵衛である。

「ああ有難え、日頃の念願、それではいよいよ遂げられるか、將軍様を眼の前に据え、思

うまんまを振舞つてやろう」

さてその藤兵衛だがその日の扮装、黒の紋付に麻上下、おとなしやかに作つたが、懐ふ中とこに呑んだは九寸五分、それとなく妻子に別れを告げ、柳宮大奥へ伺候した。

町人と云つても矢島局の実弟、立派な士分の扱いをもつて丁寧ていねいに席を与えられたが、見れば正面には御簾があり、そこに將軍家が居るらしい。諸臣タラタラと居流れている。言上役は松平伊豆、面目身にあまる光榮である。

と、伊豆守声をかけた。

「まず聞きたいは町奴の意気、即座に簡単に答えるがよい」

「はっ」と云つたが緋鯉の藤兵衛、

「強きを挫き弱きを助ける！ 町奴の意気にございます」

その言い方や涼しいものである。

「が、噂による時は、放蕩無頼の町奴あつて、強きを挫かず弱きを虐げ、市民を苦しめるということだの」

「末流の者でございます」

藤兵衛少しも驚かない。

「言葉をかえて申しますれば、真の町奴にあらざる者が、ただ町奴の面を冠り悪行をするものと存ぜられます」

返答いよいよ涼しいものである。

「町奴風という異風あつて、風俗を乱すということであるが、この儀はなんと返答するな？」

伊豆守グツト突つ込んだ。

「これは我々町奴が、自制のためにございます。と申すは他でもなく、異風して悪事をしますれば、直ちに人の目に付きます。自然異風を致しますれば、しようと致しましても悪事など、差し控えるようになりましょうか」

「なるほど」と伊豆守頷いたが、

「その方達町奴の家業はな？」

「お大名様や、金持衆へ、奉公人を入れますのが、おおよその商売にございます」

「では大名や金持共の、よくない頼み事も引き受けて、旗本ないし、貧民どもに、刃向かうようになろうではないか」

「とんでもない儀にございます」

藤兵衛ピンと胸を反らせた。

「ご鼻屑さまはご鼻屑さま、なにかとご用には立ちますが、儀に外れたお頼みは、引き受けることではござりませぬ」

立派に言い切ったものである。

「さようか」と伊豆守打ち案じたが、

「では町奴と申すもの、世上の花！ 仁侠兎だの」

「御意の通りでございます」

「で近世名に高い、町奴といえど何者かの？」

声に応じて緋鯉の藤兵衛、ここぞとばかり大音に言った。

「近世最大の町奴、藩隨院長兵衛にございます」

「ふふん、さようか、藩隨院長兵衛？」

伊豆守、首を傾げた。

「その藩隨院長兵衛というもの、町人の身分でありながら旗本水野十郎左衛門に、無礼の振舞い致した由にて、水野十郎左衛門無礼討にしたはず、さような人間が偉いのか」

「申し上げます」と緋鯉の藤兵衛、この時ズイと膝を進めた。

それから云い出したものである。

「藩隨院長兵衛事一代の俠骨、町奴の頭領にございました。江戸に住居する数百数千、ありとあらゆる町奴、みな長兵衛を頭と頼み、命を奉ずる手足の如く、違たがう者としてはございませんでした。さてところでその長兵衛、どのような人物かと申しますに、素性は武士、武術の達人、心は豪放濶達ながら、一面温厚篤実の長者、しかも俠気は満腹に允ち生死はつとに天に任せ悠悠々自適の所もあり、自分を愛する人情は、母の如くに優しくもあれば、父の如くに厳しくもあり、洵に緩急よろしきを得、財を惜しまずよく散じ、極めて清廉でございました。然るに」と言うとと緋鯉の藤兵衛、またも一膝進めたが、

「一方水野十郎左衛門、天下のお旗本でありながら、大小神祇組、俗に申せば、白柄組なる組を作られ、事々に我々町奴を、目の敵にして横車を押され、町中においても、芝居小屋においても、故なきに喧嘩口論をされ、難儀致しましてござります。自然私共におきまして、自衛の道を講ぜねばならず、それがせり合つていつも鬪争、案じましたのが長兵衛で、なんとか和解致したいものと、心を苦しめて居りました折柄、水野様より参れとの仰せ、これ必ず長兵衛をなきものにしてしよう魂胆と、子分一同諫止しましたところ、この長兵衛一身を捨て、それで和解が成り立つなら、これに上越す喜びはないと、進んで参上致

しました結果が、案の定とでも申しましようか。水野十郎左衛門様をはじめとし、白柄組の十数人、一人の長兵衛を切り刻み、その上死骸を荒菰に包み、むごたらしくも川に流し、ご自身方は今に繁昌、なんのお咎もなきご様子、殿！」と云うと今度は藤兵衛スルスルスルと下つたが、額を畳へ押し付けてしまった。

6

畳へ押し付けた額を上げると、藤兵衛云い出したものである。

「長兵衛は男にございます。それに反して、水野様は、卑怯なお侍にござります」
グツとばかりに唾を呑んだが、

「天下のお政治と申すものは、公平をもつて第一とする、かよう承うけたまわつて居りましたところ男の長兵衛が犬死をし、卑怯者の水野殿は、お咎なし！ 伊豆守様！」

凄まじい眼、臆せず伊豆守を睨みつけた。

「御身ご老中でおわしながら、それでよろしゅうござりましようか！ さあご返答！ お聞かせ下され！」

なんと云う大胆、なんとという覇氣、將軍の面前老中を前にこれだけのことを云ったので

ある。

「うむ」とは云ったが伊豆守、なんと返答したものでか当惑したように黙ってしまった。

と、その時一人の近習、伊豆守の側へ進み寄ったが何やら伊豆守へ囁いたらしい。

「は」と言々と伊豆守、一つ頷くと微笑した。

「藤兵衛」と呼んだが愛嬌がよい。

「町奴の勇ましい心意気、上様にも悉くお喜びであるぞ。ついては」と云々と居住居を正し、

「上様御諚、町奴としての、何か放れ業を致すよう」

こいつを聞くと緋鯉の藤兵衛、さも嬉しそうに言上した。

「お庭拝借致しまして、町奴に似つかわしい放れ業、致しますでござります」

「おうそうか、随意に致せ」

そこで藤兵衛庭へ下り、素晴らしい一つの放れ業をした。そうして、それをしたために、公平な政治が行なわれ、水野は切腹、家は断絶、白柄組一統の者、滅地滅祿されることになった。

その放れ業とはなんだろう。

藤兵衛、腹切つて死んだのである。

「町奴の肝玉ごらん下され！」

叫ぶと一緒に臓腑を掴み出し、地上へ置くと、

「藩隨院長兵衛と黄泉において、水野の滅亡、白柄組の瓦解、お待ち受け致すでございましょう！」

そのまま立派に死んだのである。

緋鯉の藤兵衛の葬式が、非常に盛大に行なわれた日、浅草寺で鳴らす鐘の音が一種異様の音を立てた。

手慣れた寺男のつく鐘とは、どうにも思われない音であった。

それは当然と云つてよい、ついたのは釣鐘弥左衛門なのだから。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷六」未知谷

1993（平成5）年9月30日初版発行

初出：「少年倶楽部」

1927（昭和2）年4月

※「藩隨院長兵衛」は、底本どおりとしました。

※「ズット」「グット」は底本の通りです。

入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二人町奴

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>